奈文研ニュース
2004.Dec No.15
NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp

アフガニスタンからの研修生の受け入れ

文化財研究所では、西アジア諸国文化遺産保存協力事業の一環として、本年度アフガニスタンから考古学２名、保存科学１名、建築学１名の計４名の専門家とイラクから保存科学の専門家２名を招聘して研修をおこなっています。いずれの国においても博物館収蔵品の修復保全が急務ですし、アフガニスタンにおいては、歴史的建造物や遺跡の調査が必要でありながら手付かずになっているのが現状で、専門的知識と技術を持った人材の育成が求められています。

アフガニスタンからの研修生は、考古学の２名が９月27日に来日、あと２名は10月29日に来日、12月22日までの滞在です。イラクからの研修生は10月22日に来日し12月18日までの滞在です。考古学の２名は滞在の大半を奈良文化財研究所での研修に当てています。以下、このふたりに対する研修を詳しく見てみます。

研修では基礎を重視し原理を理解してもらえるように努めました。机上の理論よりも実際の体験が大切なので、平城宮跡発掘調査部の現場で実地の訓練をおこないました。ちょうど第一次大極殿地区での調査の過程をほぼ全体にわたって経験することができました。すなわち、機械掘削、地区割り、写真撮影や壁面剥ぎ取りを見学するだけでなく、排水溝の掘り下げ、遺構検出、遺構面清掃、壁面清掃、土層断面図作成、トータルステーションによる測量、レベル移動、平板実測を実習しました。

遺跡の土の性質は日本とアフガニスタンでは大きく異なります。しかし、遺構を検出する手順やそれらの記録の仕方は風土を超えて応用可能です。慣れない機器の操作に手間取る場面はあったものの、熱心に毎日練習を繰り返すことによって上達していきました。

座学でも、理論の学習とともに実習をおこないました。まず、発掘調査の原理を学び、実際の発掘にいたるまでに必要な調査研究の内容とどのように発掘を進めていくべきなのか、順を追った講義をおこないました。もちろん研修生にとっては初めて聞く話ではありませんが、現場作業とともに学ぶことでより深く理解してもらえたと思います。

遺物の実測では、作図の原理とともに土器と石器の実測を練習しました。合わせて、打製石器製作原理も学び、実測図を報告書に載せる時の図版の作成の仕方、適切なレイアウトなどについても多くの実例をもとに講師と意見交換をしながら体得しました。瓦の拓本をとる実習もおこないました。

日本の歴史、日本考古学についての概説はもちろん、環境考古学では土壌や骨の分析を、年代測定では年輪年代学についても学んでいます。

今回の研修では、時間の制約もあり外部見学はあまり多くはおこなっていません。それでも低湿地遺跡の発掘現場で、土崩れを防ぐ対策に興味を示し、いくつかの遺跡での調査後の整備、復原建物や博物館展示での工夫に感心していました。

密度の濃い実習を熱心にこなした彼らが、アフガニスタンで成果を活かしてくれることを希望する一方、私たちの側も習慣の違いなど多くのことを学んだと思います。また多岐にわたる専門的な話を通訳してくださった方々に感謝いたします。

（埋蔵文化財センター　森本　晋）

平城宮跡の発掘現場にて